

『論語義疏』 根本刊本の底本について

影 山 輝 國

根本武夷（名は遜志、字は伯修。一六九九—一七六四）が、山井崑崙（名は鼎、字は君彝。一六九〇—一七二八）とともに享保五年（一七二〇）から享保九年（一七二四）にかけて野州足利学校に赴いて古書を校合し、その成果として寛延三年（一七五〇）に『論語集解義疏』十巻を出版したことはよく知られた事実である。

根本氏は足利学校の蔵本を底本にしたことは間違いないのであるが、ここに不思議なことがある。足利鈔本には皇侃自序が無いにもかかわらず、根本刊本には皇侃自序が附いているのである。これについては、以前拙論において、根本氏が見たときには足利本に皇侃自序が有ったが、その後何らかの事情で無くなってしまったか、あるいは元來足利本には皇侃自序が欠けており根本氏が他の鈔本から引き

写したかのいずれかが考えられるとし、後者の可能性が高いであろうことを推定しておいた（注1）。

その後、足利鈔本と根本刊本とを全文比較検討した結果、根本氏が明らかに足利鈔本以外の鈔本を参照している確証を得たので、ここにそれを示し、江湖博雅の士に供したいと思う。

まず、現在所在の明らかな鈔本三十六本をその所在別に示す。

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵

- 1 大槻本 十巻五冊 文明十九年（一四八七）写 周防
国明倫館旧蔵 大槻文彦旧蔵 安田善次郎旧蔵 九行
二十字

- 2 宝勝院本 十卷十冊 室町写 宝勝院芳卿光璘旧蔵
森立之旧蔵 大槻文彦旧蔵 安田善次郎旧蔵 九行
二十字
- 3 林本 十卷七冊(卷第五、六缺) 室町写 小嶋宝素旧
蔵 林泰輔旧蔵 一、四冊九行十六字 七、九冊八行
二十字
- 4 江風本 十卷五冊 室町写 稲田福堂江風山月莊旧蔵
安田善次郎旧蔵 九行二十字
- 5 慶応義塾大学図書館蔵
天文本 十卷八冊(卷第九、十缺) 天文十年
(一五四一)、十四年(一五四五) 写 岡田真旧蔵 九
行二十字
- 大東急記念文庫蔵
- 6 延徳本 十卷九冊(卷第十缺) 延徳二年(一四九〇)
写 稲田福堂江風山月莊旧蔵 九行二十字
- 7 久原文庫本 十卷十冊(卷第四缺) 室町写 稲田福
堂江風山月莊旧蔵 久原文庫旧蔵 九行二十字
- 8 江戸本(久原文庫一本) 十卷五冊 江戸写 久原文
庫旧蔵 九行二十字
- 京都大学附属図書館蔵
- 9 重文本 存卷二、四―八 六冊 清原良兼筆か 船橋
家旧蔵 重要文化財 九行二十字
- 10 京大本 十卷九冊(卷第四缺) 室町末から江戸前期
写 清原宣條旧蔵 八行二十字
- 前田育徳会尊経閣文庫蔵
- 11 応永本 十卷十冊 応永三十四年(一四二七) 写 与
謝郡金谷寺旧蔵 九行二十字
- 12 三宅本 十卷五冊 明治末写 三宅氏旧蔵本の写し
十行二十字
- 東洋文庫蔵
- 13 上原本 十卷十冊 室町江戸間写 上原氏旧蔵 木村
正辞旧蔵 八行二十字
- 14 米沢本 十卷十冊 江戸写 米沢藩上杉家旧蔵 八行
二十字
- お茶の水図書館蔵
- 15 宝徳本 十卷五冊 第一、第四冊は宝徳三年
(一四五二) 写 第二、三、五冊は慶長元和(一五九六
一、一六二四) 補鈔 徳富蘇峰成簣堂文庫旧蔵 一、四
冊十行二十五字 二、三、五冊八行十九字
- 龍谷大学大宮図書館蔵
- 16 文明本 十卷五冊 文明九年(一四七七) 写 西本願
寺写字台旧蔵 六行二十字
- 国立国会図書館蔵
- 17 国会図書館本 十卷五冊 文明十四年(一四八二) 奥書

本の写し 鹿島則文旧蔵 九行二十字

足利学校遺蹟図書館蔵

18 足利本 十卷十冊 室町写 足利学校旧蔵 重要文化財 (別に第四卷を明治期に模写せる一冊あり) 九行二十字

天理大学附属天理図書館蔵

19 清熙園本 十卷五冊 室町写 阪本準平清熙園旧蔵

石井光雄積翠軒文庫旧蔵 九行二十四字

神宮文庫蔵

20 神宮本 十卷十冊 室町写 磯淳旧蔵 江藤正澄旧蔵 八行二十字

宮内庁書陵部蔵

21 図書寮本 十卷五冊 室町写 宮内省図書寮旧蔵 九行二十字

蓬左文庫蔵

22 蓬左本 十卷五冊 室町写 神村忠貞旧蔵 (別に第一卷を江戸期に転写せる一冊あり) 九行二十字

都立中央図書館蔵

23 青淵本 十卷六冊 室町写 洪沢栄一青淵論語文庫旧蔵 九行二十字

東京大学総合図書館蔵

24 東大本 十卷五冊 江戸写 青洲渡辺信旧蔵 九行

二十字

関西大学図書館蔵

25 泊園書院本 十卷十冊 江戸写 藤沢南岳泊園書院旧蔵 九行二十六字

静嘉堂文庫蔵

26 静嘉堂本 存卷第二 江戸写 伊沢蘭軒旧蔵 九行二十字

新潟県新発田市市島酒造蔵

27 市島本 十卷五冊 弘化二年(一八四五)写 十行十八字

萩市立萩図書館蔵

28 萩図書館本 十卷五冊 江戸後期写 繁沢寅之助旧蔵 九行二十字

拙蔵

29 桃華斎本 十卷五冊 大徳寺多福庵旧蔵 桃華斎富岡

謙蔵旧蔵 石井光雄積翠軒文庫旧蔵 九行二十字

台湾国立故宫博物院圖書文献処蔵

30 寺田本 十卷十冊 室町写 寺田望南読杜草堂旧蔵

楊守敬旧蔵 九行二十字

31 塙本 十卷五冊 室町写 塙保己一和学講談所旧蔵

黄村向山栄旧蔵 楊守敬旧蔵 九行二十字

32 溯源堂本 存卷第一、四、七、八 三冊 卷第一は室町

写、卷第四、七、八は江戸写 有馬氏溯源堂旧蔵 楊守敬旧蔵 八行二十字

33 故宮本 存卷第四(述而篇) 一冊 室町江戸間写 楊守敬旧蔵 七行二十一字

34 九折堂本 十卷五冊 江戸写 山田業広九折堂旧蔵 楊守敬旧蔵 九行二十字

35 盈進齋本 十卷五冊 江戸後期写 盈進齋旧蔵 楊守敬旧蔵 九行二十字

36 新井本 十卷四冊 江戸末明治初写 新井氏旧蔵 楊守敬旧蔵 一〇三卷、七〇十卷十行二十字 四〇六卷 八行二十字

さて、根本氏が足利鈔本以外の鈔本を参考に行っていると
思われる決定的な証拠は以下の四つである。

第一は、八佾篇の「子曰、射不主皮」章で、集解「馬融曰：天子有三侯、以熊虎豹皮為之」の義疏である。足利本は、三獸之皮、各為一侯、故有三侯也。所以用此三獸者、三獸雄猛、今取射之、示能伏服猛也。天子大射張此三侯、天子射猛虎、諸侯射熊、卿大夫射豹也。此注先言熊者、隨語便、無別義也。

となっているが、根本本は、

三獸之皮、各為一侯、故有三侯也。所以用此三獸者、三獸雄猛、今取射之、示能伏服猛也。天子大射張此三侯、天子射猛虎、諸侯射熊、卿大夫射豹也。然此注先言熊者、隨語便、無別義也。

と「然」の字が多くなっている。「然(然れども)」という接続詞が無くても意味は十分通じるのに、どうして根本本には「然」字が有るのであろう。

他の鈔本を調べてみると、

「然」字の無いもの

大槻本1・足利本18

「然」字の有るもの

宝勝院本2・林本3・江風本4・天文本5・延徳本6・久原文庫本7・江戸本8・重文本9・京大本10・応永本11・三宅本12・上原本13・米沢本14・宝徳本15・文明本16・国会図書本17・清熙園本19・神宮本20・図書寮本21・蓬左本22・青淵本23・東大本24・泊園書院本25・静嘉堂本26・市島本27・萩図書館本28・桃華齋本29・寺田本30・塙本31・九折堂本34・盈進齋本35・新井本36

(溯源堂本32・故宮本33は当該章欠)

となっている。根本氏が足利本以外の鈔本を見て「然」字を加えた可能性が極めて高いといえるであろう。

第二は、泰伯篇の「子曰、興於詩、立於礼、成於楽」章で、集解「孔安国曰、楽所以成性也」の義疏である。足利本は、

王弼曰：若不採民詩、則無以觀風、風背亦俗異、則礼無所立、礼若不設、則楽無所楽、楽非礼則功無所済。故三体相扶、而用有先後也…

であるが、根本本では、

王弼曰：若不採民詩、則無以觀風、風乖俗異、則礼無所立、礼若不設、則楽無所楽、楽非礼則功無所済。故三体相扶、而用有先後也…

と下線部の箇所が異なっているが、「風背亦俗異」と「風乖俗異」とでは意味にさほどの違いはない。根本本はどうして文字を改めたのであろう。いまこれを他の鈔本を比べてみると、

「風背亦俗異」に作るもの

宝勝院本 2・林本 3・江風本 4・天文本 5・延徳本 6・米沢本 14・文明本 16・国会図書本 17・足利本 18・清熙園本 19・神宮本 20・蓬左本 22・青淵本 23・泊園書院本 25・市島本 27・寺田本 30・塙本 31・九折堂本 34・盈進齋本 35

「風乖俗異」に作るもの

大槻本 1・応永本 11・上原本 13・宝徳本 15・図書

寮本 21・東大本 24・桃華齋本 29・溯源堂本 32・新井本 36

「風乖亦俗異」に作るもの

江戸本 8・三宅本 12・萩図書館本 28

「風亦俗異」に作るもの

重文本 9

（久原文庫本 7・京大本 10・静嘉堂本 26・故宫本 33は当該章欠）

となっており、根本本と同じく「風乖俗異」に作っているものに大槻本 1・応永本 11・上原本 13・宝徳本 15・図書寮本 21・東大本 24・桃華齋本 29・溯源堂本 32・新井本 36が数えられる。とすると、根本氏はこれらの系統の鈔本を参照していたと思われるのである。

第三は、憲問篇の「子曰、古之学者为己、今之学者为人」

章で、集解「孔安国曰、为己、履道^{（注）}而行之也。為人、徒能言之也」の義疏である。足利本は、

徒、空也。為人言之而已、無其行也。一云、徒則図也、言徒為人説也。

となっているが、根本本では

徒、空也。外空為人言之而已、無其行也。一云、徒則図也、言徒為人説也。

と「外空」の二字が多い。「外空」の二字は無くても意味は通じるが、前に「徒、空也」とあるから、「外空（外空しく）」の二字が有った方がはつきりする。他の鈔本は、

「外空」の二字が無いもの

大槻本1・林本3・延徳本6・江戸本8・重文本9・
京大本10・応永本11・上原本13・宝徳本15・文明
本16・足利本18・清熙園本19・青淵本23・東大本
24・新井本36

「外空」の二字有るもの

宝勝院本2・江風本4・天文本5・久原文庫本7・
三宅本12・米沢本14・国会図書本17・神宮本20・
図書寮本21・蓬左本22・泊園書院本25・市島本
27・萩図書館本28・桃華齋本29・寺田本30・塙本
31・溯源堂本32・九折堂本34・盈進齋本35

（静嘉堂本26・故宫本33は当該章欠）

となっている。「外空」は思いつきで加えられるような語ではない。根本氏は「外空」の二字がある鈔本を見て補った確証であろう。

第四は、衛霊公篇の篇題疏で、足利本は、

衛霊公者、衛国無道之君也。所以次前者、憲既問仕、
故拳不可仕之君、故以衛霊公次憲問也。

であり、根本本は、

衛霊公者、衛国無道之君也。所以次前者、憲既問仕、
故拳時不可仕之君、故以衛霊公次憲問也。

と、「時」の字が多い。「故に時の仕ふ可からざるの君を拳ぐ」と「時」のあった方が意味が明確になるが、無くても意味は通じる。では根本氏はなぜ「時」を加えたのか。他の鈔本は、

「時」字の無いもの

延徳本6・京大本10・足利本18・清熙園本19・青
淵本23・東大本24

「時」字の有るもの

大槻本1・宝勝院本2・林本3・江風本4・天文
本5・久原文庫本7・江戸本8・応永本11・三宅
本12・上原本13・米沢本14・宝徳本15・文明本
16・国会図書本17・神宮本20・図書寮本21・蓬左
本22・泊園書院本25・市島本27・萩図書館本28・
桃華齋本29・寺田本30・塙本31・溯源堂本32・九
折堂本34・盈進齋本35・新井本36

（重文本9は篇題疏無し。静嘉堂本26・故宫本33は当該
章欠）

であるから、これも根本氏が「時」字の有る鈔本から補充したのであろう。

さて以上の四点においてすべて根本本と一致する鈔本は、図書寮本21・桃華齋本29・溯源堂本32である。溯源堂本32は卷二が欠落しているので、第一に挙げた八佾篇の「然」字の有無は不明であるが、「然」字が有った可能性は残る。ところがこの三本はいずれも皇侃自序を欠いている。事柄はいかに考えるべきか。『論語義疏』の鈔本は所在の明らかた上述の三十六本以外に、未知の鈔本が少なからずある^(注3)。この三本にもともと皇侃自序が附いていなかったとすれば、根本氏は足利本以外に、

① 図書寮本21・桃華齋本29・溯源堂本32の三本の系列で皇侃自序の附いている未知の一本を見た。

② 図書寮本21・桃華齋本29・溯源堂本32の三本、またはこの三本の系列で皇侃自序の無い未知の鈔本の他に、皇侃自序の附いている第三の鈔本を見た、つまり複数の鈔本を参照した。

右の①②いずれかの可能性が大きいといわねばならない。根本氏が他の鈔本を見て訂正したと思われる箇所は他にも数多くあるが、それらは根本氏が他の鈔本を見なくても自身の考えで改めることができた可能性も否定できないので、一切省略に従った。

注

- 1 拙稿「『論語義疏』校定本及校勘記―皇侃自序」(実践女子大学文芸資料研究所『別冊 年報』X 二〇〇六年三月)を参照されたい。
- 2 足利本には「道」字が無く、根本本には「道」字が有る。拙稿「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(一)」(『実践国文学』第七八号 二〇一〇年一〇月一五日)、「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(二)」(『実践国文学』第八〇号 二〇一一年一〇月二〇日)を参照されたい。
- 3

(かげやま てるくに・実践女子大学教授)